

平成21年 12月1日	農作物病虫害発生予報 12月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
----------------	---------------------------------	----------------------------

～目次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	6
III	参考(予報の見方、気象予報、12月のテレホンサービスの内容)	7

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	平年並	平年並	前年並
	うどんこ病	多	多	多
	アブラムシ類	平年並	平年並	前年並
	ハダニ類	平年並	平年並	少
	ハスモンヨトウ	やや少	少	少

作物	担当者
普通作	藤村(病害) 中川(虫害)
果樹	村本(病害) 河村(虫害)
野菜	河村(病害) 溝部(虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

II 予報

【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は0%（平年1.6%）、発病株率は0%（平年0.03%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では12月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

ア ポリオキシシン剤は県内全域で耐性菌が出現している。また、ジカルボキシイミド系薬剤（スミレックス剤、ロブラール剤）およびアゾキシストロビン剤（アミスター剤）は、一部で耐性菌が出現しているため、使用後は必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は使用を控える。

イ 薬剤耐性菌の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。

2 うどんこ病

平成21年(2009年)11月2日付け技術資料第10号を参照する。

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は50.0%（平年26.2%）、発病株率は17.1%（平年4.8%）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では12月の気温は平年並みか高く、降水量は平年並みである（±）。

(3) 防除対策

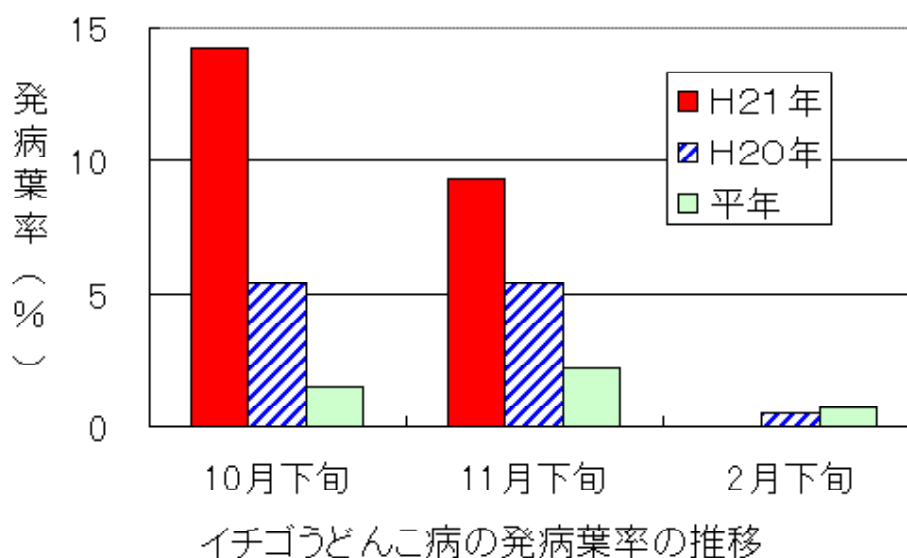
<耕種的防除等>

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

ア 発病前の予防、または、発病初期の防除を徹底する。

- イ 発生した場合、発病した葉を除去した後、薬剤防除を実施する。
- ウ トリフルミゾール剤などのE B I剤は、一部で感受性の低下した菌が出現しているため、使用後は必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は使用を控える。
- エ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1回～2回薬剤を散布する。
- オ 薬剤耐性菌の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発生初期

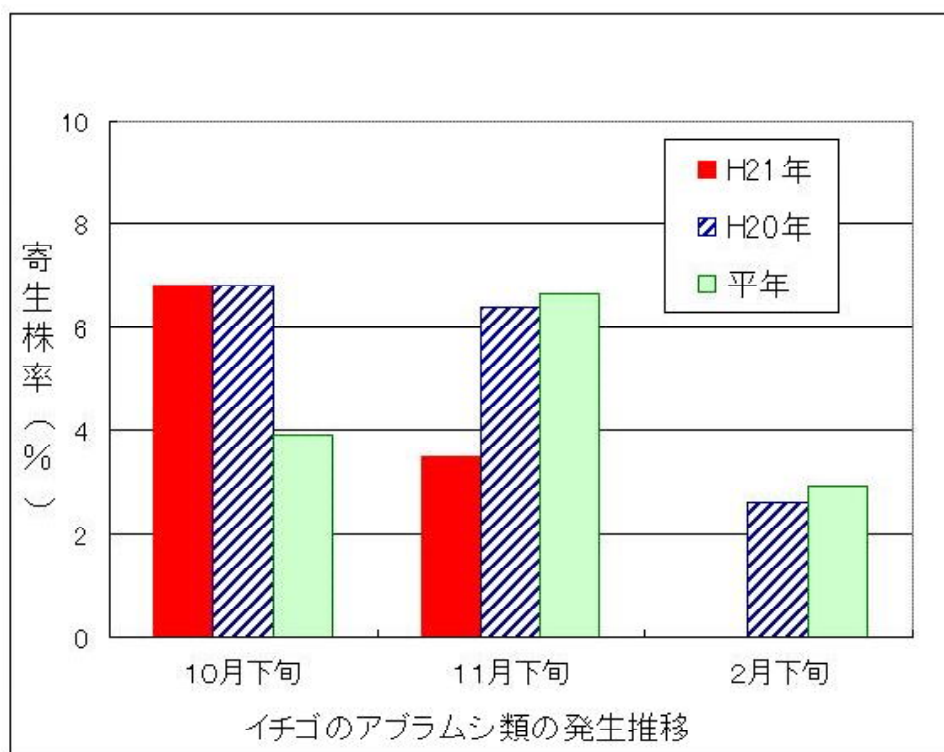
(2) 予報の根拠

- ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は30.0% (平年28.6%)、寄生株率は6.4% (平年6.3%) で平年並みであった(±)。
- イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか高い(±~+)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。
- イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。ミツバチの巣箱は、薬剤の影響が無くなってから施設内に戻す。



4 ハダニ類

平成21年(2009年)11月2日付け技術資料第10号を参照する。

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は25.0% (平年19.9%)、寄生株率は6.1% (平年5.4%) で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか高い(±~+)。

(3) 防除対策

<防除判断>

ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さいため、ルーペを使用するか、葉裏に白紙を擦り付けてハダニが潰れた薄緑色や赤色の痕跡を確認する。ナミハダニは体色が薄緑色で、体色が赤いカンザワハダニに比べ確認しにくいいため、より注意が必要である。

<防除のポイント>

ア コテツ剤、オサダン剤、サンマイル剤及びニッソラン剤は県内全域で感受性が低下している。また、その他のダニ剤(マイルコーネ剤、コロマイル剤、カネマイル剤)は、一部で感受性が低下しているため、使用後は必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は使用を控える。

イ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生

を認めたら直ちに防除を行う。

ウ 下葉の裏に多く寄生しているのので、不要な下葉を除去した後、薬剤を丁寧に散布する。

エ 気門封鎖剤等の物理的防除剤は卵には効果がないため、7～10日後にもう一回散布する。

オ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。

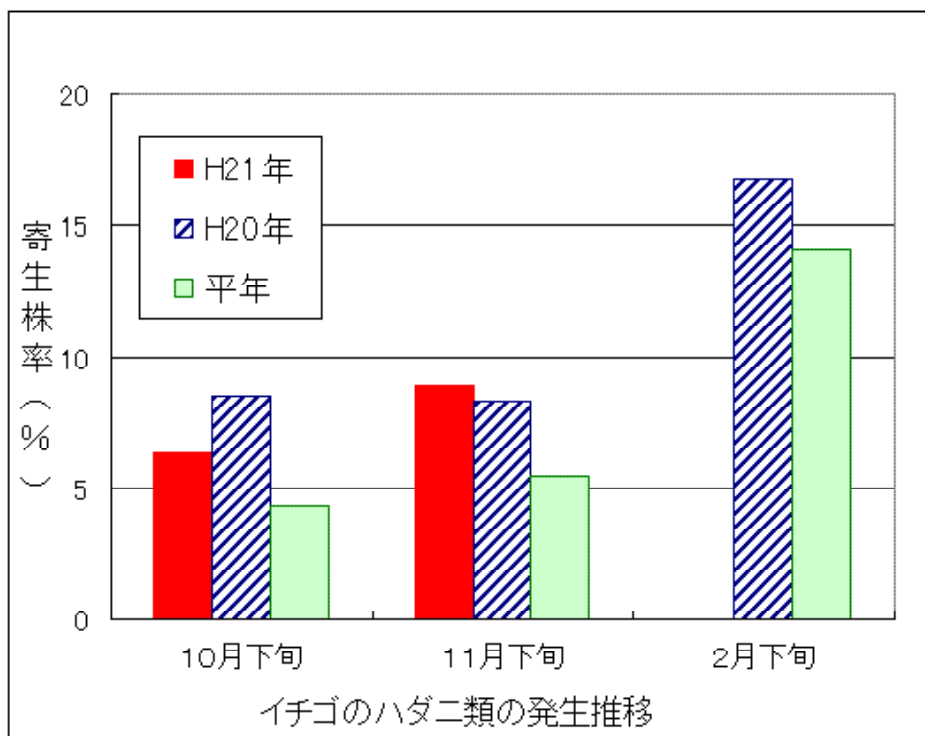
カ 天敵昆虫（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）は次のことに注意して使用する。

（ア）発生初期に放飼する（ミヤコカブリダニはハダニの発生前の放飼可能）。

（イ）天敵昆虫に影響の少ない農薬を使用する。

（ウ）ハダニが発生している場所の近くを中心に放飼する。

キ 開花期以降に薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。ミツバチの巣箱は、薬剤の影響が無くなってから施設内に戻す。



5 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	少	少	—

(2) 予報の根拠

ア 11月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は5.0%（平年15.1%）、寄生株率は0.1%（平年0.8%）で平年に比べ少なかった（—）。

イ 気象予報では、12月の気温は平年並みか高い（±～+）。

(3) 防除対策

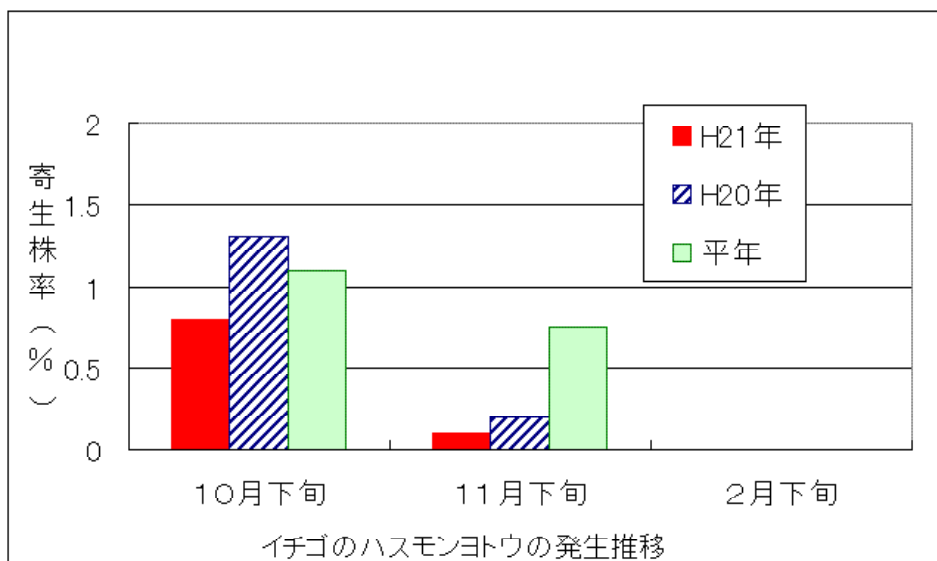
<耕種的防除等>

ア 日中に気温が上昇してくると葉や蕾の食害を始めるので、ほ場をよく観察して捕殺する。

イ 施設栽培では葉の裏や鉄骨パイプ等に産卵することが多いので、黄褐色の毛に覆われた卵塊を見つけ次第捕殺する。

<防除のポイント>

アブラムシ類の<防除のポイント>イ、ウを参照する。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	オンシツコナジラミ	やや多	多	多	30.0	16.1	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病害虫発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

（注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（11月27日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い(%) 少 ない	平年並(%)	高 い(%) 多 い
気 温	20	40	40
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	30	40

週ごとの気温傾向

予 報	低 い(%)	平年並(%)	高 い(%)
1 週 目	20	40	40
2 週 目	40	30	30
3～4週目	20	40	40

3 12月のテレホンサービスの内容（予定）TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	12月の発生予報、イチゴ病害虫の防除、果樹類病害虫の冬期防除
下旬	カンキツ類の冬期防除、イチゴ病害虫の防除